



12歳教育の実践発表

・西条東中学校1年 越智大生さん
・飯岡小学校教諭 宮崎雅延先生

12歳教育は防災を切り口に広く社会に目を向け、体験活動を通して防災の知識・技能、より確かな社会性を身に付けることを目的に、市内の全小学校6年生を対象に取り組んでいます。

12歳教育での取り組みを通して越智さんは「災害に備える意識があるかないかで、被害の程度が大きく変わる」ことを知り、最も大切なことは「災害から自分を守ろうとする意識」であると考えようになりました。

地域の聞き取り調査では「教えてもらわないと知ることのできない危険がある」ことを学び、学習したことを身近な人に伝えるようにしています。

12歳教育で学んだ感想として越智さんは「防災は人と人との交流や協力があつてこそ成り立つもの」とし、さまざまな「あいさつ」でできた交流が、いざというときに自分の命を守ることにすると考え、日頃から「あいさつ」をするように心がけています。

宮崎教諭は、この取り組みを通して教諭も児童も「地域のつながり」の大切さを痛感しており、子どもたちを育てていくには、地域の皆さんの協力が不可欠であると発表されました。

パネルディスカッション

●パネリスト

- ・大保木連合自治会長 神野顕彰氏
- ・知的障害者入所更生施設「星の里」 施設長 菅野仁美氏
- ・西条市連合自治会長 塩崎武司氏
- ・大町公民館長・防災士 村上善重郎氏
- ・西条市市民安全担当参与 國田卓二氏

●16年災害当時の状況・感想など

神野 山で亡くなられた2名は災害弱者ではなく、家族を助けようとして土石流に巻き込まれた。人生の分かれ道というか無常を痛感し、このことを教訓として、次の世代に伝えていかなければならない。

菅野 施設は土石流で壊滅的な被害を受けたが、全国から延べ2千人のボランティアが来てくれ、約5カ月半で復旧することができた。この場を借りてお礼を申し上げます。

塩崎 災害後、自主防災組織を立ち上げようと、自治会活動を通じて地域

の皆さんにお願いした。行政と協力して実践防災計画の説明会も回を重ね、平成17年に約22%だった組織率が現在では約70%になった。100%の達成をめざして活動を続けたい。

村上 災害時には公民館への避難者の受け入れを行ったが、大災害の経験もなく、情報・物品も来ないため悪戦苦闘した。この時感じたことは、避難する側は避難時の状況・タイミングの方法をご近所と一緒に考えてほしい。そして行政側は地域の状況を把握し、使命感・責任感のある職員による受け入れ体制を整えないといけない。

こうしたことを踏まえて、私は防災士の資格を取得した。この資格を地域に役立てるため、仲間と共に「大町防災士の会」を立ち上げ、①計画性のある防災訓練の実施②地域の情報収集・伝達方法の確立③防災意識の向上をめざして活動している。

國田 災害時は現地の状況把握が困難を極めたこと、現地で災害の猛威を痛感したことが思い出される。市では市民をはじめ、国、県、連合自治会、建設業協会、ボランティア等の協力を得て、総力を挙げて災害復旧に取り組み、約2年で復旧することができた。

●避難困難者にできること

菅野 災害当時、大雨に対する災害マニュアルがなかったため、施設の職員と利用者は知恵と工夫、命に対する感性で濁流の中を避難した。その教訓

を受け、事前に避難できる場所や避難用具などを確保し、災害に対応できるように、毎年、職員と話し合つて災害マニュアルを見直している。

神野 従来から山間部はコミュニケーションがよくできた地域だが、高齢化が進んでいるため、消防などのマンパワー（人の力）を借りないと避難ができない。また、自ら避難困難者であると名乗り出ない慣習があるが、命を守るため、素直に名乗り出れるような地域づくりが大事だと感じている。

塩崎 自主防災組織の本質は家族であり、それがあつて地域の防災組織が成り立つ。家庭から自治会へとながれば、真の自主防災組織率100%が達成されるのではないだろうか。

